

私は生まれつきのろう者です。小学生のころは、今のようにテレビ番組に字幕がほとんどなく、家族とテレビを見て楽しむことができませんでした。そのため、父がレンタルビデオ店で「E・T」や「ロッキー」などの洋画を借りてきてくれました。映像と一緒に内容が分かる。家族と一緒に見て楽しむことができた。本当にうれしかったです。

洋画からたくさん感動と勇気をもたらした私は、次第に自分も映画監督になりたい！ 大勢の人に元気や勇気を分けてあげられるような映画を作りたい！ と思うようになりました。

しかし日本の大学では、講義保障（講義が分かるように手話通訳などをつけること）がないため、自分の学びたい映画制作を学ぶことができません。愛知教育大学に入学しましたが、映画制作を学ぶために一年間休学してカリフォルニア州立大学ノースリッジ校（CSUN）に留学しました。

CSUNはアメリカで二番目にろう者が多い大学です。学内にろう・

難聴学生をサポートするセンターがあり、アメリカ手話通訳やノートテイク（話者の話している内容を紙に書くこと）、パソコン通訳などが提供されています。その様子を目の当たりにして「なんて素晴らしいんだろ」と感動しました。ろう学生の「聴者学生と同じ受講料を払っているから講義の内容を知る権利がある。そのため講義保障は当然である」という考え方に驚き、勇気づけられました。ろう者も聴者（聞こえる人のこと）と同じように人間らしく生きていいんだ。聞こえないからとあきらめたり、小さくなる必要はないのだと。

帰国後、愛知教育大学に復学し、手話通訳派遣を要望しました。そして、それは大勢の方の協力のおかげで実現しました。

初めて講義に手話通訳がついた時の感動は今でも忘れられません。モノクロのようだった講義が立体的になり、色彩を帯び、生き生きと私の目、頭、体、心に入ってきました。「この先生は大阪弁をよく使うんだな」とか「あの学生はおとなしそう

に見えるけれど、なかなかおもしろい考えを持っているじゃないの」などと、小さいけれどもおもしろい発見がたくさんありました。それまでは、ただ座ってノートテイクの紙を読んでいるだけだったのに、講義に参加しているんだという実感がわいてきました。

友達が通う大学では、ノートテイクや手話通訳を要望しても、大学からは「自分の努力で乗り越えるように」と言われていました。講義が終わった後、友人のノートをコピーするだけで講義の間はずっと座っているだけと聞いて、ショックを受けました。しかし、こういう例は珍しくないということも知りました。

「このままではいけない。大学も、ろう・難聴学生に対して、どのように講義を保障すればいいのかが分からないのでは」と思いました。そこで私は、参考になるビデオを作ろうと、講義保障の取り組みをしている大学と、ろう学生を取材して、DVD「ユニバーシティライフ」が誕生したのです。

映画で共に生きる社会を

今村彩子



今村彩子（いまむら・あやこ）

愛知県名古屋市出身。愛知教育大学教育学部卒業。Studio AYA代表。カリフォルニア州立大学ノースリッジ校留学（映画学科・アメリカ手話を学ぶ）。現在、名古屋学院大学、愛知学院大学で講師をする一方、ろう・難聴者を取り上げたドキュメンタリーを制作。国内だけにとどまらず、アメリカやカナダ、韓国など海外にも取材に行く。全国各地で自主上映や講演活動もこなしている。<http://studioaya.com/>



「ユニバーシティライフ ～ろう・難聴学生の素顔～」
文部科学省選定／聴覚障害者映像フェスティバル大賞受賞
2,500円（税・送料込）字幕付
（VHSは売切れ／DVDは残りわずか）